

幼少期における都心の思い出と印象に関する研究

―世代別分析―

福岡大学工学部社会デザイン工学科 辰巳 浩, 堤 香代子, 西坂 従道

1. はじめに

郊外の大型ショッピングセンターの開業に伴い地方の中心商店街はシャッター通りと呼ばれるなど、衰退が問題になっている。今後、このような現象は都心といえども例外ではない。

人は子供の頃の記憶は重要で、子供の頃に都心に対してあこがれを抱くことで大人になってからも都心に気持ちが向くと思われる。そのために、子供の頃の意識を高めていくことが重要であると考えられる。そこで、都心の魅力を高め、都心の活力を維持するために、幼少期における都心の思い出に着目する。

本研究は、人々の幼少期における都心の思い出や印象を調査し、幼少期に都心のどこに行っていたか、世代別にどのように都心が変化してきたか、現在とその時代の都心の状況との関係性を整理し、今後の都心の在り方について考察を行う。

2. 調査概要

福岡市民を対象に、人々の幼少期における都心の思い出や印象を調査した。調査内容は幼少期に都心へ行った経験、その頻度、そのときの主な交通手段、誰と行ったか、主な目的、都心でよく行った場所、都心で楽しかった思い出等である。また、都心のイメージを17個の形容詞対ごとに5段階で評価するSD法の設問も設けた。アンケートの調査項目を表1に示す。

なお、現在の幼少期（小学校を卒業する前）の子供と比較するために、幼少期の子供のいる家庭では子供へのアンケートも実施した。

アンケート調査は2013年9月末の週末に、福岡市内の戸建てや集合住宅にポスティング形式で配布し、後日、郵送回収の方法で実施した。配布部数は5,000部であり、福岡市の7区に人口比に応じた部数を各区分でポスティングをした。なお、回収部数は606部で回収率は12.1%である。また、子供を対象としたアンケートは128部が回収された。

表1 アンケート調査項目

個人属性	性別、年齢、職業、幼少期の住所
都心の記憶	都心へ行った経験、頻度、利用交通手段、誰と、目的、主に行った地区(自由記述)、主に行った場所(自由記述)、楽しかった思い出(自由記述)、子供にとって都心に不足しているもの(自由記述)
都心の印象	SD法による17個の形容詞対ごとの5段階評価 小学生以下の子供がいる家庭には子供にも実施：大人、都心に行った経験、頻度、利用交通手段、目的、誰と、都心の印象

3. 調査結果

回収された606部のなかの有効部数は579部であり、この579部について一方、子供を対象としたアンケートの128部については分析を行う。

3-1. 個人属性

大人を対象としたアンケートの被験者の個人属性を図1に示す。性別では男性29%、女性約68%であり、女性の割合が高い。年齢層は10-20歳代がやや少なく7%、30歳代と40歳代と65歳以上が約20%前後、50-64歳がやや多く31%であり、年齢層に大きな偏りはみられない。職業は会社員・自営業・公務員の有職者が38%、パート・アルバイトと専業主婦と無職・その他が約20%であり、職業でも大きな偏りはみられない。幼児期の一番記憶に残っている住所は福岡市内が41%、その他の福岡県が24%、福岡県以外が35%である。

年齢層と性別のクロスでは、女性は男性よりも50歳以上の割合が少ない。また、職業とのクロスでは男性は有職者の割合が高く、62%を占める。また、女性は専業主婦が31%を占める。都心へ行った経験の有無では、行ったことがあるが85%、行ったことがないが11%である。

現在の子供の性別は男性と女性の割合は各50%で、幼稚園と小学3年までの低学年と小学4年以上の高学年の割合はいずれも約34%の1である。

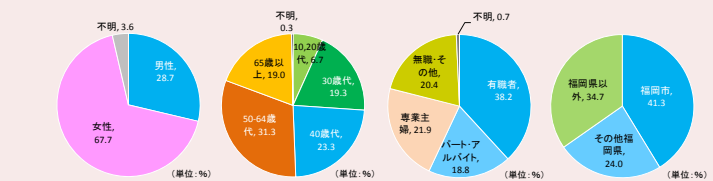


図1 大人の被験者の個人属性 (n=579件)

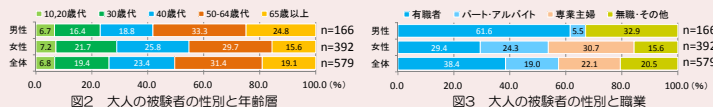


図2 大人の被験者の性別と年齢層

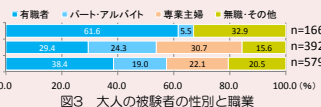


図3 大人の被験者の性別と職業

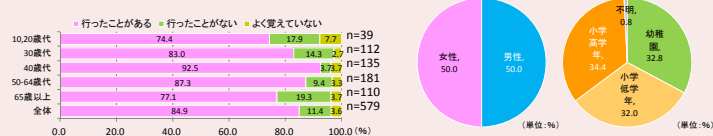


図4 大人の被験者の年齢層と都心へ行った経験の有無

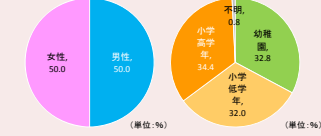


図5 子供の被験者の個人属性 (n=128件)

3-2. 幼少期における都心の来街頻度

大人を対象としたアンケートの被験者579人のうち幼少期に都心へ行ったことのある490人について、都心の記憶についての集計結果を示す。一方の現在の幼少期の子供は128人中120名である。

■頻度：幼少期に都心へ行った頻度と年齢層の結果を図6に示す。大人では年に数回が60%、月に数回が32%を占める。現在の子供もほぼ同じ割合である。

■誰と：誰と都心へ行ったかでは、大人の被験者では親と行ったが80%、現在の子供は88%で、親と都心へ行く割合が非常に高い。頻度とのクロスでは、親と行く場合は年に数回が60%、月に数回が34%である。

■目的：都心へ行った主な目的は、買い物・娯楽・食事が大人の被験者で86%、現在の子供では89%を占める。

■交通手段：都心への利用交通手段の年齢層別の結果を図8に示す。現在の子供は自動車利用が34%に対し、年齢層が上がるに従い自動車の割合は減少し、65歳以上では自動車利用が約10%。反面、JRや私鉄の鉄道の割合は増加している。

なお、現在の子供は全員が福岡市民であることから、子供を連れた都心までの交通手段は鉄道16%、地下鉄20%、バス26%、自家用車34%、徒歩・その他4%といえる。

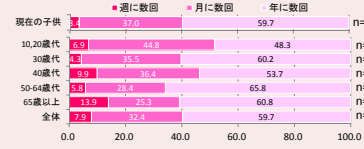


図6 年齢層別都心への来街頻度

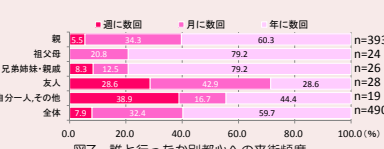


図7 誰と行ったか別都心への来街頻度

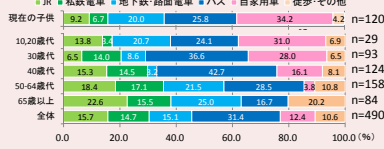


図8 年齢層別利用交通手段

3-3. 都心の印象

■プロフィール曲線：幼少期と現在の都心のイメージを、17個の形容詞対ごとに5段階で評価したSD法の結果を、形容詞対を「状況」「環境」「意識」を表す形容詞対に並び替えて図9に示す。なお、現在の子供には楽しさ、好み、行きたいの3個の形容詞対の設問を設けており、併せて示す。混雑度と安全性を示す形容詞対では評価が3以下、その他は3以上であり概ね良い印象である。現在より幼少期の方が評価が高く、特に意識を表す形容詞対ではその傾向が強い。状況を表す形容詞対でも幼少期の方が評価点が高いが、大きな差はみられない。環境を表す形容詞対では幼少期と現在の評価にほとんど差はみられない。なお、現在の子供との比較では現在の子供の方が若干評価が低い。

現在と幼少期の年齢層別プロフィール曲線では、現在の評価では良い悪いの形容詞対で若干の差がみられるが、年齢層別に大きな差はみられない。しかし、幼少期に評価では年齢層でみられ、若い年齢層ほど評価点が高い傾向がみられる。その他の属性で幼少期と現在の印象を比較したが、年齢層別が最も特性が表れた。

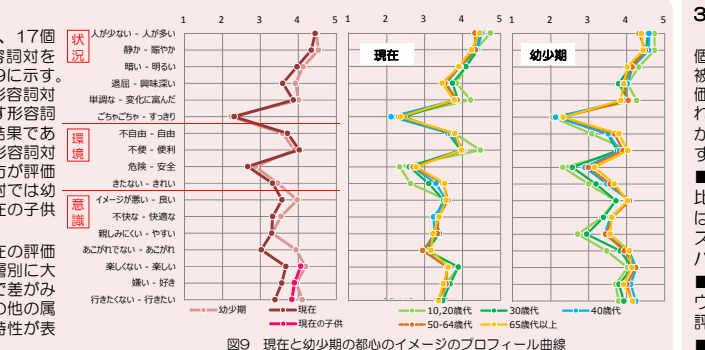


図9 現在と幼少期の都心のイメージのプロフィール曲線

■現在と幼少期の評価の関連性：都心のイメージについて、現在と幼少期の評価の相関図を4個の形容詞対のみに図10に示す。なお、グラフ内の数値は人数を表す。形容詞対17個全てについて相関図を求めると、全ての形容詞対で直線の傾きが正であった。その結果、次の2点が明らかとなった。

- ①現在の評価よりも幼少期の評価が高い
- ②幼少期の評価が高いほど現在の評価も高い

■都心でよく行っていた場所：記述内容を10分類に整理し、年齢層別に図11に示す。全体ではデパートの館内や屋上が48%、デパート内のレストランや食料売り場が15%、商店街などが10%を占める。64歳以下では年齢が下がるに従いデパートの館内の割合が減少し、特に、10-20歳代は33%と大きく減少している。その反面、映画館や文化施設の割合が21%を占める。また、若い世代になるにつれおもちゃ売場の割合が増えている。

■都心で楽しかった思い出：記述内容を8分類に整理し、年齢層別に図12に示す。全体では食事が楽しかったという割合が最も多く35%を占める。次いで、自分の体を動かして遊ぶ遊戯場・公園・動物園が21%、物を買ってもらうが13%、買い物・ウィンドショッピングが9%である。年齢層では年齢層が下がるに従い物を買ってもらう割合が多くなり、10-20歳代では31%を占め、遊戯場が12%に減少している。

■都心に不足しているもの：記述内容を8分類に整理し、年齢層別に図13に示す。全体では休憩場所・無料の遊び場が25%、自然・緑・運動のできる公園が23%、安全性が16%を占める。年齢層では40歳代を境に年齢が下がるに従い自然・緑・運動のできる公園と安全性の割合が増えている。

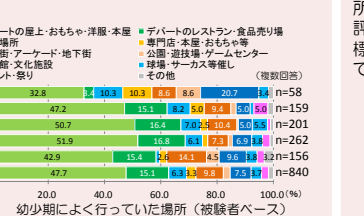


図10 現在と幼少期の評価の関連性

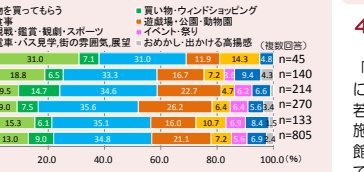


図11 幼少期によく行っていた場所 (被験者ベース)

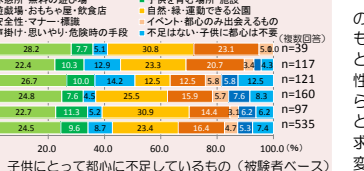


図12 幼少期に楽しかった思い出 (被験者ベース)



図13 子供にとって都心に不足しているもの (被験者ベース)

3-4. 都心への意識の変化

幼少期と現在の評価の差が大きい意識を表す形容詞対7個について、評価の差別に集計した結果を図14に示す。被験者の36%は幼少期と現在の評価は同じで、45%は評価を下けている。また、40歳以上でその現象が顕著に表れている。そこで、幼少期から現在の評価が2~4段階下がった被験者のみを抽出した。なお、この結果は意識を表す7個の形容詞対の総計(述べ745人)である。

■都心でよく行っていた場所：図10の被験者ベースと比較して、評価を2~4段階下げた被験者に大きな違いはみられない。しかし、10-20歳代では球場・サカス等の催しものに行っていた被験者と、30歳代ではデパートの屋上等へ行っていた被験者が評価が下がった。

■都心で楽しかった思い出：10-20歳代で買い物・ウィンドショッピングが楽しかった思い出の被験者が評価が下がった。

■都心に不足しているもの：10-20歳代において休憩所・無料の遊び場が不足していると考えている被験者が評価が下がっており、30歳代において安全性・マナー・標識が不足している被験者が評価が下がった。40歳代では不足はない子供に都心に不要の被験者が下がった。

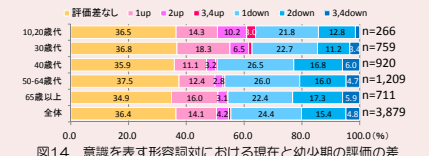


図14 意識を表す形容詞対における現在と幼少期の評価の差

4. まとめ

都心の印象は「人が多い」「賑やか」「便利」な場所、「楽しい」「行きたい」場所であることがわかり、全体的により評価であることがわかった。都心でよく行く場所は若い世代になるにつれてデパートから映画館などの多様な施設に分散されてきている。特に、10-20歳代では映画館の割合が高くなり、おもちゃ売場の割合が徐々に増えている。都心は子供にとって遊ぶ場所から物を買ってもらう場所へと変化がみられる。

幼少期の頃の都心への意識(評価)と現在の都心の評価の関連性を見出した結果、現在の評価は幼少期の評価よりも低いものの幼少期の評価が高いほど現在の評価も高いことが明らかとなった。都心に休憩所・無料の遊び場、安全性、自然・緑・運動のできる公園などが望まれていることから、また、都心に遊戯空間が少なくなっていることから、子供が楽しく遊ぶ場所を整備していくことが求められているといえる。都心へ行きたいと思う要因を多変量解析で求めたが、今回のアンケート項目では表すことができなかった。

